ようやく開かれる大回顧展

大阪の郷土的色彩の一大パノラマ

大阪を代表する日本画の巨匠の大回顧展が市内で開催されている。あべのハルカス美術館「没後70年 北野恒富展　なにわの美人図鑑」（開催中～ 7月17日まで、休館6月12日、26日）である。

北野恒富（1880～1947）は、少年時代に金沢から来阪し、大阪で画家として独立した。横山大観の誘いで日本美術院の再興に大阪から最初に参加した同人であり、作品も大阪の特色を濃厚に示して、東京の鏑木清方、京都の上村松園と並んで三都を代表する美人画家として知られる。

実は、美術史を専攻する私のライフワークの一つが、近代大阪画壇を代表する北野恒富の研究であり、展覧会にも監修者として参加させていただいた。その立場から言うのもなんだが、信じがたいことに、今回が恒富没後70年を経て大阪市内ではじめて開かれる回顧展となる。

これほど著名であり東京では大回顧展が開かれている、対して地元の大阪ではなぜ回顧展が開かれなかったのか。この問題を掘り下げることが、現在も大阪が抱える文化芸術の発信力低下の問題を考える上で重要だろう。

展覧会では、恒富の作品から資料まで可能な限り網羅した。明治末から大正前期の恒富は、南地の花街を本拠に妖艶な美人画に特色を発揮する。「心中天網島」を題材にした《道行》（福富太郎コレクション資料室所蔵）は、「画壇の悪魔派」と呼ばれた初期の名作で、洋画風の写実にアールヌーヴォー調の装飾を加味し、独特の退廃美をつくりだす。

2015年が大坂夏の陣から四百年であった記憶は新しいが、夏の陣から三百年の大正中期は、歴史を題材に格調高い作品を描く。落城の淀君を描いた《淀君》（耕三寺博物館所蔵）は恒富畢生の力作である。

昭和になると、《いとさんこいさん》（京都市美術館蔵）で商家の姉妹を対照的に描いて、谷崎潤一郎の『細雪』執筆を刺激したとされ、《星（夕空）》（大阪市立美術館所蔵）も、船場界隈の商家の夕涼みを、大阪らしい「はんなり」とした情感で描く。

これらの名作に加えて、高島屋や菊正宗のポスターや小説挿絵の原画など、多様なジャンルに跨がる膨大な点数が出品される。大阪の画家の実力を理解できる展覧会であり、大阪人ならば、恒富を知らずに大阪を語るなかれと自慢したくなるはずだ。これほど優れた芸術家が、これまで自ら愛した大阪で忘れられていたのが不思議である。

そういえば長年停滞していたが、2021年度中の開館を目指し、大阪市の新美術館コンペの結果が今年、発表された。当初1990年代にオープンするはずだった美術館で、恒富の展覧会は本来、その開館記念を飾るべき性質のものだった。

アトリエにて、恒富の制作風景

《朝のクラブ歯磨き》、恒富はポスターでも大活躍した

美術館で思い出すのが、昭和11（1936）年に天王寺の大阪市立美術館が開館するに際し、都市問題研究誌『大大阪』が識者による新美術館への期待を特集し、恒富が語った言葉である。

「大阪の人々が、一般に美術に無関心と云ふだけ位の事なら、少しく教養のある人なら、容易に出来る観察である。その無関心、無理解さが、如何に甚だしいものであるかは、矢張り大阪に永らく住んで、作家生活を経験してきたものでなければ、深刻な体験を持たない。如何に物質万能だとて、余りだと最初は情けない思ひがするが、はては憤激の念ともなり、やがてはあきらめに移り行くのである。」（北野恒富「日本的大阪的なものを－美術館の誕生に寄せて－」）

画家として恒富は大阪という土地に、ある種の絶望感を抱いていた。しかし、美術館建設で少し希望の灯が見えてくる。

「今度、大阪に美術館が出来た。誠に衷心より喜びに堪えぬ処である。その運用如何に依つては、私共の抱いてゐる、大阪人の美術に無理解な態度についての、あきらめの感情は棄て去る事が出来るかも知れない。否、これを機縁として、大阪人士に美術教育を普及せしめるやう、お互に努力せねばならぬと思ふのである。」（同前）

今回の回顧展も然り、動き出した新美術館の建設も然り。当の大阪人が大阪の文化芸術を深く知り、それを応援しなくては、大阪の未来は明るく開かれない－80年前も今もその状況はつづく。

筆者プロフィール
橋爪 節也　はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村蒹葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』（創元社）など。